

論文要旨

戦後日本における近代化記憶と「場」の揺らぎ —メディア・イベント「明治百年祭」（1968）を例に—

本研究は戦後日本の国家的メディア・イベントの一つである「明治百年祭」を記憶研究の視点で分析するものである。高度経済成長期の日本において、1968年の「明治百年祭」は「東京オリンピック」、「日本万国博覧会」と並んで重要な国家的行事だった。1964年に行われた東京オリンピックは、日本の戦後復興の象徴として国民に広く記憶されている。他方で1970年に「人類の進歩と調和」をテーマに掲げて開催された「日本万国博覧会」、いわゆる大阪万博では、日本が近代化の最先端に立ち、また平和な国として繁栄を遂げていることを、国民は実感した。

この「東京オリンピック」と「大阪万国博覧会」の間にある国家的行事の一つが「明治百年祭」だった。明治元年（1868年）から100周年を記念して、佐藤栄作内閣は1968年10月23日に、「明治百年記念式典」を武道館で催した。それは日本の近代化の成功を言祝ぐ国民儀式でもあった。佐藤内閣は東京のみならず、全国各地で、様々な関連イベントを計画・実施している。

そもそも「明治百年祭」には、日本人が過去の100年間で政治、経済、文化その他すべての面にわたってどのように奮闘努力を重ねたことを振り返り、その近代化の歩みを肯定する歴史観を国民に共有させる目的で計画された。そこには大衆社会化の中で拡散する国民アイデンティティを再統合するねらいもあった。この「新たな」記憶作りプランはイベントの準備段階から明らかだった。

それに対して、「明治百年祭は歴史の見方をゆがめ」、「過去の歴史を美化する」として、歴史学者・教育者などを中心に猛烈な反対運動も巻き起こった。歴史学界での反対運動は準備会議の開始（1966）とともに始まり、式典が行われた1968年10月23日後も続いた。基本的に、歴史家たちが問題にしたのは日本政府の近代化イデオロギーであり、マルクス主義的な体制批判が主流だった。明治維新からの百年間にわたる近代化プロセス、つまり資本主義化を肯定的に捉える記憶は、史的唯物論者の目には危険なものと映った。

こうしたイデオロギー対立もあり、「明治百年祭」に関する先行研究は「東京オリンピック」や「大阪万国博覧会」と比べ圧倒的に少ない。反対運動を行った歴史家の批判記事とその解説論文が存在するばかりである。それ自体は歴史資料として有用だが、「明治百年祭」をメディア・イベントや記憶研究の視点から客観的に分析した論文ではない。必要なのは、イベントの形式や内容を社会的コンテクストから検討し、東京のみならず他の地域イベントと比較考量する研究である。

一方、近年盛んになった記憶研究の視座から見れば、重要な研究対象は明治維新「そのもの」よりも明治百年祭「イベント」である。高度経済成長期の日本社会で試みられた記憶のポリティックスを考察する上で、「明治百年祭」はターニングポイントなのである。だが、日本の記憶研究においては、もっぱら「戦争の記憶」に関心が集中し「近代化の記憶」はなお周辺的である。本論文は、日本の記憶研究に新たな地平を切り拓くことを目的としている。

各章の概要とそこで得られた知見は、以下の通りである。

第1章で、本研究の課題、先行研究、問題意識、メディア・イベントの概念、記憶研究からの視点などを整理した。

第2章では佐藤栄作内閣によって企画された「明治百年祭」を準備段階からイベントの終了まで検討し、政府側の企画意図を明らかにした。

政府は、過去百年間の近代化を肯定的に捉え、「明治百年祭」イベントを通じてその見方をはっきり示した。準備会議における政府の報告書、さらに各事業や行事の報告書を検討しても明らかだが、政府は国民に好感させるようなイベントを企図していた。先行研究の示すような、「ナショナリズムの問題」あるいは「軍国主義的な問題」だけに絞られるべきではない。これらの問題の重さを認めつつ、本研究では佐藤栄作内閣が「明治百年祭」イベントを通じて構築しようとした記憶の全体像にスポットを当てる。それは、明治時代に始まる肯定的な「近代化」記憶の構築であり、政府側は日本全国各地のイベントにおいて過去百年間の日本の歴史を「きれいなもの」として国民が回顧するような記憶作りに努めた。

第3章では政府が「明治百年祭」を実施するまでのプロセスにおいて知識人とマスメディアの役割に焦点を当て、マスメディアによって構築された近代化の記憶について考察した。

「明治百年祭」における論壇の議論は1960年代初頭に桑原武夫と竹内好から提起され、日本の「中間文化界」である総合雑誌上で展開されてきた。「明治百年祭」の実施が閣議決定された1966年まで、明治維新の再評価と日本の近代化について多様な議論が盛り上がった。知識人のこの動きは「明治百年祭」における社会の関心を高める役割を果たした。後に、政府の意図に批判的だった研究者たちは「限定文化界」であるアカデミズムにおいて反対運動を開始した。彼らは政府のやり方を批判するだけでなく、自らの反対運動を全国レベルに発展させようと試みた。しかし、その目的は達成できず、反対運動はアカデミズムの内部に留まるものとなった。他方で、1966年の政府の公式発表以後、「大量（マス）文化界」であるマスメディアも反応を見せた。新聞や雑誌などの活字メディアからラジオやテレビの放送メディアまで、明治時代を舞台とする様々な作品が公開され、日本社会において明治ブームが引き起こされた。とりわけ、司馬遼太郎『坂の上の雲』や大佛次郎『天皇の世紀』など、今日まで多くの日本人に読み継がれているいくつかの作品も登場した。こうしたマスメディアの影響により、明治に対する国民の関心は高まった。その結果、明治時代を明るいイメージでとらえる歴史観が生まれ、近代化の肯定的な記憶が構築された。

第4章は地域研究の観点から「明治百年祭」イベントを分析する。対象としては、イベントが中央（東京）のそれと最も異なる特徴を持っていた京都府開庁百年祭（以下、京都の「明治百年祭」）を選び、準備会議、行事、事業、記念式典をそれぞれ検討した。過去百年間の近代化にスポットを当てた中央のイベントに対して、京都の歴史記憶がいかにも異なっていたのか、京都にとって明治百年祭はどのような意味を持っていたのかを明確にした。さらに、記念映画『祇園祭』を分析対象とし、記憶研究のフィルム・スタディーズにも挑戦した。

政府が首都（東京）を中心に日本全国で押し出した「先人に感謝する」、「日本の過去百年の近代化を誇りに思う」という理念に対して、古都（京都）は地域性から政府側と異なるようなイベントを企画した。明治時代を肯定的に認識するような傾向はなく、「明治」が冠

せられた行事もほとんどなかった。記念映画『祇園祭』は五百年前の応仁の乱とその後の祇園祭の復活をテーマに掲げたものである。「明治百年祭」を記念するために政府から予算を受けて、明治時代と関係のない記念映画を製作した京都は特異である。他の自治体は、その地域の過去百年間の歴史を描くドキュメンタリー映画を製作している。

明治維新により天皇が京都から東京に移ったため、京都人からみて「明治維新」は文化首都衰退の象徴でもあった。それを祝うこと自体が京都の人々にとってアンビバレントなものであったはずだ。特に、「明治百年祭」計画に対して早くから猛烈な反対運動を行った歴史学者の組織も京都に存在していた。「過去の百年間はただのバラ色ではない」という歴史意識は京都の場合、もっとも鮮明だったのである。明治維新に対して京都が東京と異なる記憶を持っていることにより、京都では政府が意図した近代化の肯定的な記憶の構築ができなかったと言える。

第5章では、「明治百年祭」の国際的な展開を検討した。ハワイで行われたハワイ日本人移民百年祭（以下、ハワイの「明治百年祭」）が対象である。同イベントに対する見方について、日本側とハワイ日系人の両サイドからの比較分析を行った。まず、日本側にとってハワイのイベントが持つ意味とハワイ側のそれを説明した。日本の狙いにもかかわらず、ハワイ側は過去百年に関して日系人固有の記憶を持っており、その記憶をイベントを通じて再構築している。それが最も明確に見えるイベントとして、ハワイの記念映画『夜明けの二人』を分析し、第3章と同様に、フィルム・スタディーズからの記憶研究を展開した。

ハワイの場合も、日本政府が明治期を肯定的に捉え、現代日本社会を近代化の達成としてハワイ日系人に伝えようとしたことが分かった。つまり、政府はこのイベントを通して、過去一世紀で日本社会の発展に努めた先人に感謝し、その近代化を誇る国民的な記憶を作ろうと試み、それをハワイ日系人にも承認させようとした。日本側がハワイの「明治百年祭」あわせて制作した記念映画『夜明けの二人』にはその狙いが明らかであり、映画には近代化した日本社会の挿話が多数入っていた。

それに対して、ハワイ日系人が祝った「明治百年祭」イベントは、一生懸命働き、ハワイで強いコミュニティを作った日系人のその努力を称えるものであった。その正式名称（ハワイ日本人移民百年祭）からも分かるように、日系人側はこのイベントを「移民100年祭」として記念しようとしたが、日本政府はそれを日本国内の「明治百年祭」に関連するイベントとして考え、国境を超えた記念イベントとして特に重視していた。ハワイの記念式典にわざわざ皇族として常陸宮夫妻が出席しているのはその象徴である。

一方、ハワイでは「明治百年祭」を記念する記念物として「平等院テンプル」が建築されている。これは、オリジナルが京都にある平等院の真似たものであった。つまり、日本のイメージとして、日本政府側が東京を中心とした日本の近代化の記憶を日系人に植え付けようとしたのに対して、日系人の記憶にある日本は九百年前の京都であり、近代化よりも伝統文化へのノスタルジアが強調されていた。つまり、ハワイの「明治百年祭」における記憶創出において、日本政府側とハワイ日系人側の間で大きな葛藤が存在したわけである。

終章では、ここまでの議論を踏まえ、総括を行う。ここまで東京オリンピックと大阪万国博覧会の間で忘却されてきた「明治百年祭」は、戦後日本で政府が主導した最も大きなメディア・イベントの一つである。佐藤卓己(2013)は次のように指摘している。「東京オリンピ

ックが戦後復興の『現在』を実感させ、大阪万博が高度情報化の『未来』を幻視させたといえらるだろう。ここでは、「東京オリンピック＝現在」、「大阪万博＝未来」、「明治百年祭＝過去」という3時制の相関図が提示されている。だとすれば、「明治百年祭」は戦後日本の近代化の記憶を構築した国家的メディア・イベント3点セットの一つとして考察されねばならない。

「明治百年祭」を記憶研究の観点から検討すると、政府側が構築しようとした近代化の記憶とそれに対して京都が持っていた伝統的記憶、あるいはハワイ日系人の移民的記憶がそれぞれ異なるものだったことが分かった。歴史的な事件や出来事を記念するイベントも、さまざまな「記憶の場」（ピエール・ノラ）で、異なる反応を引き起こしたわけである。国家主導のイベントであっても、全国各地を、まして海外まで含めて、形式を統一することは困難であった。

1980年代から登場し、現在も盛んに行われている記憶研究だが、日本の場合は第二次世界大戦を中心とした戦争体験の記憶における研究蓄積がほとんどであり、「明治百年祭」のようなメディア・イベントが構築する「近代化」記憶の研究はほとんど存在しない。また、戦争の記憶研究といっても、負けた戦争のネガティブな記憶が日本の記憶研究の中心対象になっている。もちろん、日本には戦争の記憶以外にもさまざまな記憶が存在する。それを新たに開拓する上で、「明治百年祭」のような国家メディア・イベントの分析は特に重要と言えるだろう。

これまで「明治百年祭」における効果と影響について、それが失敗だったと断定する先行研究が多い。しかし、本研究は「明治百年祭」をメディア・イベントの記憶研究の視点から分析することで、そうした歴史学者の議論とは異なる視座を提供している。

「明治百年祭」が日本全国において十分に盛り上がったとは言えず、必ずしも佐藤栄作内閣の想定した方向には進まなかった。また、国民の参加感覚を得るための行事や事業が多数催されたとしても、公式的な記念式典への国民の興味は低調だった。これらに加えて、「明治百年祭」が現在ほとんど忘れられているという事実を考えると、これに反対した歴史学者が指摘するように「明治百年祭」イベントは失敗したように見える。しかし、行われたイベントそのものが記憶されていなくても、イベントを通じて作られた記憶はたくさんあり、その中には大きな影響力を認めることもできる。日本政府の計画したもの以外にも、「明治百年祭」に便乗する出版企画や映画制作が展開され、あるいはラジオ番組やテレビドラマなどが多数放送された。さらに、「明治百年祭」関連記事は新聞に連日掲載されており、この記憶イベントにおけるメディアの役割が大きかった。つまり、国民の記憶に影響を与えたのは、政府の公式的なイベントではなく、明治維新をあらゆる形で物語化したメディアだった。とりわけ、「明治百年祭」を契機に執筆された大佛次郎『天皇の世紀』や司馬遼太郎『坂の上の雲』は日本人の明治認識を転換させた作品として高く評価されている。これらの歴史小説は後にテレビでドラマ化され、現在まで大きな影響をとどめている。つまり、政府の計画した「明治百年祭」イベント自体の影響力が短期的に小さかったとしても、そのイベントをきっかけにして作られた作品は長いスパンで絶大な影響力を誇ったのである。

「明治百年祭」を通じて、日本の近代化の記憶を検討した本研究は、日本の戦後史と日本人の歴史認識を理解するのに役立つだけではない。2018年に開催が決定した「明治150年祭」が現在の日本社会で持つ意味を理解する上でも重要な手がかりにもなるだろう。さらに言えば、トルコ人である執筆者が2023年に予定されている「トルコ共和国百年祭」イベントを研究する上で、不可欠な比較研究の対象となるはずである。

(5929字)

TOPACOGLU HASAN
京都大学大学院
教育学研究科・教育科学専攻
生涯教育学講座